

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです

強気、負けん気、思いやり、だよな。

取締役就任の内示を受けたとき、心底驚きました。34 歳の誕生日から三日目のことでした。「君の思うように、存分にやればいい。『守破離』の離になったなと思ったから役員にしたのだからね」

会長室を訪ねると、そう言われました。

守破離。能の世界の言葉です。修業に入ったら、どんなに理不尽と思おうが、師の言うことはすべて守り抜く。師の言わんとすることが、行動としていつもできるようになったら、少し師の教えを破ってみる。つまり、自分流を入れてみる。師の言わんとすることを理解したとの確信があるから、できるのです。

そして最後、思い切って師の教えから離れてみる。この地平から足が離れたと知った瞬間、いったい何を感じるのだろうか、そう思いました。「これからは、孤独を感じるかもしれないよ。自分を信じていればいい。まっすぐに進みなさい」そういえば、上場前。誰もが沈滞したように見える会社で、みんな好き勝手を言っていました。そのなかで、船井先生は一人で誰にも助けを求めず、上場への詰めをしていたのです。

あのとき、先生は孤独を感じていたのだろうかと、思いました。上に立つということは、その組織の未来を一人で担うということです。誰に愚痴することも、誰を頼ることもできません。

だからこそ、誰よりも力がつき、成長するのだと思います。いっそう、現場とは差がついてしまうのです。その思いを口にしてみました。上場の新聞記事を見たとき。トップはなんと孤独なんだと、思い知ったこと。だからこそ、トップのマクロな視線を共有し、せめて思いを同じくしようと決意したことを伝えました。「いつも本当に教えられて、足下にも及びませんが、会長の心を理解できる自分でいたいと思います」しばらく、不思議な静けさが会長室に訪れました。ニコニコと私を見つめる船井先生の顔に、少しですが、気恥ずかしさを感じました。

「強気、負けん気、思いやり、だよな。負けないぞと立ち向かいなさいよ。すべてのことにね。そんなときは、思いやりを忘れているから、意識して思いやりをもちなさい」

自分に何ができるのだろうか？強気でさまざまな課題に立ち向かえるのだろうか？そんな心細さが、胸のなかにありました。「自分の長所に、いつも目を向けなさい。その長所で生きていくんだ。きみにしかできない仕事をしてくれよ」そう言われました。自分は自分でしかない。だとすれば、自分の長所を見つめて、私にしかできないことに、まず立ち向かおう、そう思いました。

株主総会の日。新任役員候補の席に座っています。場違いだな、そう思いつつ席にいました。短い株主総会の後、役員になった事実、ようやく気づきました。自分は自分なりです。無理することもなく、かといって出し惜しみすることなく、自分であり続けることだなど、静かに納得していました。「よいと思うこと、確信がもてること、そして自分にとって長所だと思うことに、全力を尽くしなさい。期待しているよ」どんなときも船井先生は、船井会長なのだなと思えました。

船井総研に入って 12 年目の春。一つのことを心に誓っていました。「どんなときも、よりマクロの善に思いを馳せよう。マクロに考えられる自分でいよう。常に未来のためにと発想できる自分でいよう」当時の手帳に、黒々と墨書しているその文字をみると、高揚する自分の気持ちがありありと思い出されます。

著者は、「守破離」とは何と言っていますか？

()